

メッセージアウトライン コロサイ人への手紙 1:9~12 「私が祈り求めること」

[9]「こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように」

「霊的な知恵(ソフィア)」…神が与えてくださる上からの知恵および善悪を識別し人生を洞察させる能力。「理解力(スチス)」…真理や知識を現実に適用する能力。この世の知恵や知識は人を誇り高ぶらせるが、神からいただく霊的な知恵と理解力は神のみこころに関する真の知識を満たす。

[10]「また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように」

パウロはコロサイ人たちが頭だけ、口先だけのクリスチャンとなることなく、主にかなった歩みをし、あらゆる点で主に喜ばれる者となるようにと祈る。それは実生活においては「あらゆる善行のうちに身を結ぶ」というかたちで現れてくるものである。さらに「神を知る知識を増し加えられますように」と祈る。私たちは信仰の対象である神御自信をよく知らなければならない。

「鰯(いわし)の頭も信心から」であってはならない。私たちは真の神を知れば知るほど、その愛の、広さ、深さ、高さに驚嘆し、またその聖さや全知全能のご性質に触れれば触れるほど恐れ、謙虚にさせられ、自分が無に等しい者であることを実感させられる。そしてそこから主を賛美し礼拝をするという思いが出てくるのである。

[11]「また、神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて、忍耐と寛容を尽くし、」

10節で教えられているような生き方は真の神を信じる信仰者ならば誰でも願うことであるが、問題はそれを実行することが困難であるという現実がある。善を行おうと思ってもその逆をしている自分がある。→ローマ7:18~24 救われたとはいえ、人間のうちに住む罪の性質は、その肉に働きかけて善ではなく悪を行わせるのである。しかしパウロはローマ人への手紙を7章で終わらせたのではなく次の8章でそれに打ち勝つ方法も示している。それはひとこと言えば、「キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理」(ロ-マ8:2)である。そしてそれがコロサイ人たちに対しては「神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされ」るようにと祈りとなってあらわれている。主にかなった歩みをし…あらゆる善行のうちに実を結ぶ生き方は私たち自身の力ではなく、神からの力が必要である。すべての権威、権力を持っておられる神から力をいただき強くされ、肉に従わず、御霊によって歩んでいく時、良い実を結ぶことができるのである。→ガラテヤ5:16~23,エペソ1:19

また、後半では忍耐と寛容を尽くせるようにとも祈られている。ここで言われている「忍耐」とは何かに耐えるというだけではなく、どんなものごとにも征服されな

い精神であり、栄光ある勝利に至るために目の前に広がっている走るべき道を走りぬく力のこと。「寛容」とは自分に向かってなされた挑発や敵対行為に対し、ことばや行為によって報復に出ず、かえってそれを忍び、人に対する忍耐と信頼と希望とを決して失わない精神のこと。コロサイ人たちだけでなく、私たちもこのような神からの力を祈り求めなくてはならない。

[12]「また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように」

パウロはここで、コロサイ人たちが父なる神に感謝をささげることができるようにと祈る。なぜなら神が豊かな恵みを与えてくださったからである。その恵みとは「光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格をわたしたちに与えてくださった」ということであり、その相続分とはもともとは神が選民イスラエルに与えてくださったカナンの地を意味した。しかし、パウロは今やそれを霊的に適用して、クリスチャンの相続分はカナンの地ではなく、光の中にある神の永遠の御国であると教える。元来そのような相続分を受ける資格を何一つ持っていない者たちに神はその資格をもイエス・キリストにあって与えてくださった。これは全くの恵みである。コロサイ人たち、そして私たちも「もはや他国人でも寄留者でもなく今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族」(エペソ2:19)とされている。このすばらしい恵み、すばらしい事実を深く覚え、心から神に感謝をささげる者とならなければならない。そして、実生活においても神からあらゆる力をいただいて強くされ、忍耐と寛容を尽くし、主にかなった歩みをし、良い実を結ぶものとなりたい。